JILPT開発 職業情報・就職支援ツール 活用の現場を訪問

労働政策研究・研修機構（JILPT）では、職業情報、職業適性、職業相談・指導といった求職者の適職探しを支援するためのツールを研究・開発。その成果を、出版物、ディスク、インターネット上での公開などさまざまな形で提供しています。当機構が開発したツールを就職支援に活用している三つの現場を訪問しました。

I 高校生就職スタートブック

埼玉県立浦和商業高校

『高校生就職スタートブック』は、高校の二年生後半から、就職活動を目前に控える三年前半までを主なターゲットにした進路のワークブック。厚生労働省の全国都道府県労働局などを通し、毎年約四〇万部が希望各校に配付されている。

Q&A方式で展開する、わかりやすさが売りモノの一つ。「とりあえずフリーター、っていうのもあるんじゃない？」「私を採用すると将来的にお得です、って企業にわかってもらえるといいんだけど…」といった具合に、親近感をもたせるよう作られている。

一〇年でおよそ八分の一まで減った高卒求人の推移など、データも豊富に網羅。解説を読みながら、ワークシートに自分のデータを書き込めば、そのまま進路学習の記録になる。自習用に、ホームルーム教材にと活用法はさまざま。学校現場から、その一例を紹介したい。

スケジュールを押さえる

埼玉県立浦和商業高校は、一九二七年に設立された県内きっての伝統校。卒業後の進路は、全日制で就職五五％、進学四五％に分かれる。『就職スタートブック』を今春から、三年時の進路学習「総合実践」の教材に採用した。

「今日はまず、就職までの流れを見ていきます」進路指導主事の柿沼浩二先生のかけ声に、生徒が一斉に『就職スタートブック』を開く。

「企業がハローワークに求人票を提出し始めるのが六月二〇日で、学校に求人が申し込まれるのは七月一日から。みなさんは、学校がこれを整理したあとで、閲覧できるようになります」

フローチャートをもとに柿沼先生が説明するのは、高校新卒の就職紹介スケジュール。学校と産業界の意見を踏まえ、厚生労働省と文部科学省が毎年、共同通知で示す。授業時間を確保し、採用選考の公平性を担保するためだ。

生徒はこのスケジュールを、頭に入れておく必要がある。応募書類の作成や就職試験の準備など、その時々に求められる適切な行動をとらなければならない。例年、学校推薦が固まるのは九月初旬で、選考は後半からスタート。選考封切りは今年も一六日で、一回めは一六～一八の三日間に集中する見込みだ。

「うまくゆけば一〇日ほどで内定通知が届きます。一度ダメでもあきらめないで。埼玉県は一一月二日、一月二五日に進路の先生も引率する合同就職面接会があります。書き込んでおくように」

求人の出足はここ数年、少しずつ遅くなる傾向にある。就職内定の時期も後ろにズレ込みがちだ。九月末時点で内定が取れるのは、全国平均でわずか三人にひとりにすぎない。就職活動も長丁場になると、生徒もやる気を失いかける。投げやりにならないためにも、先々の日程の把握は有効だ。

「あとでまた、求人票の『特記事項』のところで説明しますが…」そう前置きして柿沼先生が説明したのは、昨年、一人一社制から併願応募が認められるようになった就職慣行の見直し点。埼玉県では一〇月一日以降、事業主の了

解が得られれば、一人二社まで受験できるようになった。

就職活動スケジュールをおさえておくようにと強調する柿沼先生

求人票の読み方を学ぶ

授業半ば、昨年受理した大手電気事業所の求人票が配られた。『就職スタートブック』には、統一様式をとる高校新卒者向け求人票の、労働条件などを説明したページがある。これらを見比べながら、柿沼先生が続ける。

「この会社の始業は午前八時四〇分になっていますね。でも、新人は三〇分前に行くのが常識。朝食も食べなければならない。女性はお化粧もするでしょう。準備に一時間くらいみる。通勤に三〇分かかるとしたら、起床は六時半ということになります」

生徒たちに実際の生活をイメージさせながら、求人票を読み解いてゆく。なるほどと感じたのは、賃金の話に入ったときだ。

「『現行賃金』にマルがついているのは、来年の新卒者の賃金がまだ決まっていないということ。この会社の場合は月給で、何カ月分というボーナス算定のもとになる基本給が一一万九二〇〇円、手当が三万九四〇〇円。でも、社会人になれば義務もある。納税で四四一〇円、失業や病気になったときの社会保険で一万四〇三七円マイナス。手もとに入るのは『差引支給額』で、一四万一五三円になります」

高校生ともなれば、アルバイトの一つも経験している生徒は多い。だが時給には詳しい生徒たちも、月給の天引きにはなじみが薄い。求人票のオープンをひと月後に控え、賃金の話になると表情が一段と引き締まる。

「採用数と比べた、離職者数の記述も重要です」柿沼先生は、求人票の下の方にある『採用・離職状況』欄を取り上げる。幸いにして具体例にはゼロが並ぶが、生徒たちはこの点を見落としがちだ。高卒の場合、最初の就職先を三年の間に、二人にひとりがやめてしまう。『就職スタートブック』の相談窓口一覧は、漠然とした不安も軽減してくれる。

「企業選びは知名度や規模だけにとらわれず、求人条件をよくチェックして。仕事の内容や賃金、就業時間や通勤の利便などいろいろな希望があると思いますが、すべて満足いく求人は難しい。何を優先するのか、明確にして臨んでください」柿沼先生は声のトーンを高め、授業をしめくくった。

経験談を後輩に話す

同校の場合、一～二年は就職の武器ともいえる資格取得に励む。進路学習は三年で、「総合実践」の単位として集中的に学ぶ。

興味ある職業の洗い出しから、履歴書の書き方などのノウハウまで、週一時間一七週のカリキュラム。テキストは、従来から使用する『浦和商業進路の手引き』と『就職スタートブック』を併用。具体的なカリキュラムは、次のような内容だ。

▽先輩の就職先などを調べる「就職活動を始める前に知っておこう」三時間▽生活習慣や得意分野、将来の目標などを「考えてみよう」三時間▽希望する会社を調べ、求人票の見方などを学ぶ「進めるために」三時間▽ビデオを活用した面接準備に二時間▽教育実習生との懇談、フリーターについての討議、労働法・ビジネスマナーなどの学習に各一時間。

三年生の二学期後半から三学期にかけては、進路選択のプロセスで直面した悩み、迷い、決意などを生徒ひとりひとりが作品にまとめる。そして二年生を前に、パワーポイントでプレゼンテーション。先輩の経験談は後輩の就職活動に活かされ、『資格と就職に強い浦商』づくりの一翼を担う。

「試験内容は、性格の当てはまるものにマルをするような適性検査。簡単だったはずが、結果は不採用。デパート内のお店をいつも利用している会社で、簡単に考えていたことが敗因。数日落ち込んだけれど、先生を訪ねて希望の見直しから始めた」

「就職が決まった！　早く仕事に慣れ、信頼されるよう頑張りたい。余裕ができたら高校であきらめた資格も取りたい。委員会・ボランティアは積極的に、検定もどんどんゲットで頑張れ、後輩！」

作品集には、試行錯誤のあとが刻まれていた。

◇　◇　◇

『高校生就職スタートブック』を利用する高校には、今年から、これを活用した授業例などを盛り込む指導者用『職業ガイダンスブック』も、併せて配付される予定。作成した金崎幸子ＪＩＬＰＴ副統括研究員は、「厳しい就職環境のもと、高校の先生をはじめ若者の就職を支援するサポーターの役割が、ますます重要になってきています。一つの手がかりとして、ご活用ください」と話す。

（調査部　渡邊木綿子）

進路室には先輩の経験談が張り出されている